

21世紀プログラム受験生の受験準備行動に関する調査分析

- 入試方式の評価の一環として -

高等教育総合開発研究センター

21世紀プログラム教育開発研究部門 岡田 佳子

1. はじめに

本稿の目的は、21世紀プログラム受験生の入試に対する意識及び準備行動の分析を通じて、現在21世紀プログラムの学生選抜に用いられているAO入試の在り様について評価を試みることにある。

21世紀プログラムでは、受験生に学力試験を課さず、代わりにアドミッション・オフィス入試（以下AO入試）による選抜を実施している。AO入試は、受験生がもつ能力・適正や学習意欲、目的意識などといった、得点化が極めて困難な諸項目を判定基準に組み込むタイプの入学試験である。

21世紀プログラムの場合、AO入試は二回にわたって行われ、その内容も多様なものとなっている。まず、一次試験では三つの講義を聞き、各講義に対してレポートを課す。その後、一次試験合格者に対し採点者のコメントをつけたうえでレポートのコピーを返却し、二次試験では①講義に関する受験生自身のテーマ設定によるプレゼンテーション及び討議、②面接、そしてそれらを踏まえ、最終的に③小論文の執筆が課される。このように、21世紀プログラムの入試では学力試験はないが、レポート執筆やプレゼンテーションなど、通常の筆記試験による大学入試とは異なる方法で学生を選抜する。

果たして、こうした独自性の高い入試に対し、受験生はどのように対応しているのだろうか。これを明らかにするために、高等教育総合開発研究センター21世紀プログラム教育開発研究部門では、平成16年度入試の第二次試験受験者を対象とした無記名による質問紙調査を行った。

今回、この調査を企画した理由の一つは、現行の入試方法に対し、何らかの形で評価を行う必要があると考えたためである。AO入試の場合、入試方法は大学または学部毎で個別に設定され、一度設定された入試方法はその後も継続的に用いられる場合が多い。そのため、当初はたとえ独自性が強い入試であっても、年を重ねる毎に受験生側の経験は蓄積され、彼らの体験談などを通じて入試の特徴は次第に明示化されていく。これにより、年を経ると共に受験への対策はたやすいものとなり、次第に対策方法も何らかの形で形式化していくことになる。

平成16年度入試は、21世紀プログラムの4回目の入試となる。伝統的な学力による入試と比べてユニークな入試方式、と評される21世紀プログラムの入試²も、経年によって起こる問題点はないのか、確認する必要があるだろう。

そこで、本稿では、受験生がAO入試に対してとる準備行動や入試に対する意識という観点から、現行の入試方法の在り様について検討を行ってみたい。何故ならば、受験生の準備行動や入試に対する意識を検討することにより、現行の入試方法が21世紀プログラムのアドミッションポリシー（入学者受入方針）に合致した受験生を集めることに成功しているのかどうかを知ることができると考

えるためである。本稿では、受験生に対して行った質問紙調査の分析を通じ、現行の21世紀プログラムの入試方法がもつ長所と短所を検討してみたい。

本稿では次の二点について検討する。第一に、21世紀プログラムの受験生が入試に際し、どのような準備行動をとっているのか、その実態を明らかにすることを試みる。これにより、現行の入試方式がもつ長所と短所を導き出してみたい。第二に、21世紀プログラムの受験生は、どのような意識をもって入学を希望するのかという点について検討を行う。この第二の点についての検討は、21世紀プログラムがとるアドミッションポリシーと受験生がもつ特性との合致度を確認するためである。これにより、現行の入試方式が21世紀プログラムで求める資質の学生を集めることに成功しているのかについて確認したい。

2. 調査方法

(1) 調査対象

本調査で対象としたのは、21世紀プログラム第二次選抜（平成15年11月13日実施）の受験者50名である。今回、一次選抜ではなく二次選抜の受験者を対象としたのは、一次選抜および二次選抜の両者に関する準備行動について検討しなかったことと、また、受験時に実施する調査であり、受験者に対する負担をなるべく軽減する必要を考慮したためである。

(2) 調査方法

配布法による。入試受付の際に質問紙を配布し、最終試験である小論文の終了時までには教室内に設置された回収箱に提出してもらったこととした。また、本調査は無記名で実施された。本調査が入試選抜には一切関係ない旨を質問紙表紙に表記し、また配布の際にも受験生に対し再度確認した。回収率は94.0%（50部配布中47部回収）であった。

3. 回答者の属性

まず、21世紀プログラム2次試験受験者の属性について示す。受験者の性別は、表1にみられる通り、女子（35名：74.5%）が男子（12名：25.5%）の3倍程度の人数となった。

表1：回答者の性別			表2：回答者の所属		
	人数	%		人数（うち男子）	%
男子	12	25.5	現役	39（9）	83.0
女子	35	74.5	既卒	8（3）	17.0
合計	47	100.0	合計	47（12）	100.0

表3に、これまでの21世紀プログラムにおける志願者数及び合格者数を男女別に示した。ここに示されるように、21世紀プログラムでは例年、第1次選抜の受験時には男女の割合が半々であっても、第2次選抜では男女の比率が1：2になるという現象が続いている。しかし、今回の平成16年度入試では、1次選抜の段階で、男女比は約1：2（29名：61名）となり、本調査が対象とした2次受験者ではさらにその差は拡大し、約1：3³（12名：35名）になった。

本年度，このように1次段階で男女比が不均等になった理由としては，メディアで提供される情報の影響が表れているのかもしれない。後に詳しく述べるが，21世紀プログラムの受験生の8割強がホームページを利用して情報収集を行っている。例年は，志願者の男女比は均等でも，合格者の男女比は1：3となっており，男子の実質倍率は平成13年度入試の8.8倍から平成15年度入試の12.0倍へと年々厳しくなっている⁴。21世紀プログラムに関するホームページや様々な記事にこの男女比のデータが提示されることで，男子の受験生が合格しにくいという印象を持ち，受験を回避した可能性が考えられる。

表3 21世紀プログラムの志願者・合格者数

	平成13年度		平成14年度		平成15年度		平成16年度	
	男	女	男	女	男	女	男	女
志願者数	44	42	64	57	60	45	29	61
1次合格者数	12	26	15	26	15	25	13	37
最終合格者数	5	15	6	16	5	14	5	20
実質倍率*	8.8	2.8	10.6	3.6	12.0	3.2	5.8	3.05

*実質倍率は筆者の計算による

また，受験生の現浪に関しては，現役生が全体の8割強（83.0%：47名中）を占め，既卒生は全体の2割弱（17.0%）となっている。しかし，既卒生の受験人数が8名しかいないというのは，21世紀プログラムの全国的な認知度が未だ低いことを示している。現在，21世紀プログラムに入学する学生は九州地区が中心となっているが，今後，全国から受験生を獲得したいと考えるならば，予備校や出版社など受験産業への情報提供，もしくは，現在九州内の高校を対象に行っている九州大学及び21世紀プログラムの説明会の範囲を全国的に拡張していくことなどといった，21世紀プログラムそのものの認知度を高めていく試みが必要となる。

4. 調査結果①：受験までの準備行動について

(1) 受験決定時期

まず，受験生が21世紀プログラム受験を決定した時期について検討してみたい。決定時期を，(1)高校1年生/(2)高校2年生/(3)高校3年生1学期/(4)高校3年生夏休み/(5)高校3年生2学期以降/(6)卒業後 の6項目に分けて質問したところ，結果は表4の通りとなった。

表4 受験決定時期

	高校1年生	高校2年生	高3： 1学期	高3： 夏休み	高3 2学期以降	卒業後	合計
人数(名)	4	7	11	11	7	7	47
割合(%)	8.5	14.9	23.4	23.4	14.9	14.9	100.0

受験生の約半数（46.8%：47名中22名）が高校3年生の1学期までに受験を決定している。特に，約2割（23.4%）の生徒は，21世紀プログラムへの受験を高校2年生までの早期に決めている。

この受験決定時期が早いか遅いかによって、その後の準備行動にも差異が見受けられた。以下では、高校3年生の1学期までに受験を決定した群を「決定早期群」、それ以降に受験を決定した群を「決定遅延群」として分析を進める⁵。

(2) 21世紀プログラムを知ったきっかけ

次に、現在21世紀プログラムに関する広報活動がどの程度機能しているのか確認するために、受験生が最初に21世紀プログラムを知ることとなったきっかけについて複数項目から選んでもらった。自由記述も含め、回答数の多い順は下記の通りである。

<最初に何を通じて21世紀プログラムを知ったか>

(全回答者47名中の%。括弧内は回答者数)

- | | |
|-----------------------------|----------------------------|
| ①大学パンフレット 19.1% (9名) | ②ウェブサイト 17.0% (8名) |
| ③学校の先生 14.9% (7名) | ④友人 10.6% (5名) |
| ⑤説明会 ⁶ 8.5% (4名) | ⑤先輩 ⁷ 8.5% (4名) |
| ⑦新聞 6.4% (3名) | ⑧オープンキャンパス 4.3% (2名) |
| ⑧受験情報誌 4.3% (2名) | |

受験生が最初に21世紀プログラムを知るきっかけとなったメディアとしては、大学パンフレットや先生・友人・先輩などといった学校関係の項目が上位を占め、新聞や受験情報誌など出版系メディアの影響力はさほど大きくない。一方、同じメディアでも情報収集が容易であるためか、ウェブサイトにより初めて21世紀プログラムを知ったものの割合は比較的多い。

21世紀プログラムは九州大学の中でも比較的、受験情報誌や新聞記事などといった出版系メディアへの露出が多いが、これは実際のところ、受験者を獲得するための方策としてさほど機能していない様子がうかがえる。受験情報の獲得については、やはり高校生が日常的に過ごす学校の影響力が大きいのであろう。特に、学校を通じた人間関係(学校の先生、友人、先輩)によって、情報を得ているものも多い(計34.0%)。今後、より多くの受験生を獲得するためには、高校に対する情報提供をより積極的に展開していくことが望ましいといえよう。

(3) 受験までの情報収集方法

AO入試という独自性の強い入試に際し、受験生はどのように情報を収集しているのだろうか。

本調査では、情報収集の方法として(1)ホームページ(2)オープンキャンパス(3)orbit(21世紀プログラム学生によるプログラムの紹介誌)(4)在学生を通じて(5)その他(自由記述)の5つを回答項目として設定し、利用した項目については複数回答可とした。受験生が21世紀プログラムの情報収集に用いた方法(複数回答可)を回答割合の多い順に挙げると以下の通りとなる。

<何をを用いて情報収集を行ったか>(全回答者47名中の%。括弧内は回答者数。複数回答可)

- | | |
|---------|-------------|
| ①ホームページ | 85.1% (40名) |
|---------|-------------|

- ②オープンキャンパス 59.6% (28名)
- ③Orbit (学生作成のプログラム紹介誌) 59.6% (28名)
- ④在學生を通じて 42.6% (20名)
- ⑤その他 14.9% (7名)

これより、ホームページ⁸や、学生による21世紀プログラム紹介誌 Orbit などのメディア活用はもちろんのこと、オープンキャンパスや在學生との人的交流を通じてプログラムの実際の様子について詳しく知ろうとする意思が受験生に見受けられる。

この間は複数回答可であり、多くの受験生は複数の方法によって21世紀プログラムについての情報収集を行っている。彼らは何通りの方法によって情報収集を行ったか示したのが表5である(最大5通り)。

表5 受験生が用いた情報収集方法の数

方法数(個)	5	4	3	2	1	0
人数(名)	1	11	15	10	9	1
割合(%)	2.1	23.4	31.9	21.3	19.1	2.1

受験生の大半は、21世紀プログラムに関する情報を入念に収集したうえで受験に臨んでいる。受験生の半数以上(57.4%:47名中27名)は3通り以上の方法を用いて情報収集を行っており、全体の約4分の1(25.5%:12名)が、質問紙に項目として設定した全ての選択肢(HP/オープンキャンパス/orbit/在學生)についての利用がみられ、様々な方法を用いた入念な下調べをしたうえで受験に臨んでいることが示されている。

また、複数の方法を用いた情報収集を行っているのは受験決定時期が早い生徒に多く見られる。高校3年生1学期までの段階で受験を決めた「決定早期群」(22名)のうち、9割近く(19名:86.4%)が3通り以上の方法を用いていた⁹。

受験生がこのように、複数の方法によって情報収集活動をとっているのは、点数化される試験学力に比べ、AO入試がもつ入試基準が不明瞭であることに由来する行動と考えられる。

受験生の多くが目にする九州大学21世紀プログラムの選抜に関するホームページには次のように記されている。

「本プログラムに応募する学生に求められているのは、単に「試験に合格する」ことだけを目的とした知識ではなく、大学に入学後に徹底的に自己の能力を高めるための旺盛な好奇心と柔軟な思考力、そして21世紀のリーダーシップを担おうとする大きな志です¹⁰。」

ここに記される「旺盛な好奇心」「柔軟な思考力」「大きな志」などは、特定の方法によって培われるという性質のものではない、曖昧な用語である。そのため受験生は、これらの用語が21世紀プログラムにおいてどのような意味をもっているのかを確認するべく、オープンキャンパスやOrbitなどを用い、実際のプログラムの様子について調べようとするのであろう。オープンキャンパスや

Orbit では、入試選抜の様子がプログラムに所属する学生自身の言葉によって語られる¹¹。このような、学生の経験談から得られる様々な情報は、受験生が21世紀プログラムの入試選抜の実際と、そこで求められる能力のイメージを形成するうえでの一助になると考えられる。

本調査は無記名で実施しているため、こうした情報収集方法の差異が入試合格にどの程度影響を及ぼしているかを知ることができない。それでも、受験生の情報収集がAO入試という方法に由来するものであるとすれば、この入試方法には一定の効用がみられる。

何故ならば、受験生が実際の学生生活に触れることのできるようなメディアを用いて情報収集を行うことは、彼らに入学後の学生生活を想定させることを可能にするためである。21世紀プログラムは、学生が専門教育を自ら構成するという点で通常の学部とはカリキュラムの性質が大きく異なるため、選択に迷うタイプの学生が不適合を起こす可能性も決して低くはない。そのため、受験生が様々な形でプログラムについての情報収集を行うことは、入学後の大学生活への不適應を回避しやすくなるという点で望ましいことと考える。これはある意味、AO入試の効用といえるだろう。

(4) 第1次選抜に対する準備行動

①志望理由書の作成期間

受験生は21世紀プログラムの受験に際し、志願票、高校調査書、志望理由書の提出を求められる。この中で入試に際し重要な役割を果たすのが志望理由書である。自らが何故21世紀プログラムを志望するのかという意味または意欲をアピールするための志望理由書を一体どれだけの期間で作成したのか日数を尋ねた。

すると、回答者全体の平均値は8.4日、最頻値が7日(47名中13名:27.6%)となり、全体としては1週間程度で書き上げていることがわかる。

この志望理由書の作成期間も、受験決定時期によってかける時間が異なっている。表6に受験決定時期による平均作成期間の違いを示した。

表6 受験決定時期×平均作成期間

決定時期	高校1年生	高校2年生	高3の1学期	高3夏休み	高3の2学期	卒業後
平均日数(日)	12.3	12.1	8.2	7.6	3.3	7.9

これに示されるように、受験決定時期が遅くなる程、志望理由書の作成期間は短くなり、受験の早期決定群が、情報収集や志望理由書の執筆を入念に行う傾向があることがわかる。本調査は無記名実施のため、決定早期群の入念な準備が入試合格にどの程度影響を及ぼすかについては明らかにできないが、今後検討の余地がある。

②第1次選抜の対策方法

21世紀プログラムの第1次選抜は、文理系にとらわれず、「純学問的なもの」「総合的なもの」「実験的なもの」を組み合わせで行われる3つの講義¹²(各約50分)を聞き、その後レポートを作成する(各約70分)形で進められる。

まず、この第1次選抜の対策を行ったかどうかを受験生に尋ねたところ、何らかの形で対策を行っ

た者は約半数（55.3%：47名中26名）であった。この傾向については受験決定時期での差異はみられなかった。

次に、対策を行った者に対し、どのような方法をとったか(1)読書(2)時事問題の学習(3)小論文の練習(4)その他 の4項目から選んでもらった（複数回答可）。結果は下記の通りである。

< 第1次選抜の対策方法 >（全回答者47名中の%。複数回答可。括弧内は回答者数を示す）
 (1)読書 27.7%（13名） (2)時事問題 19.1%（9名） (3)小論文 25.5%（12名）
 (4)その他 12.7%（6名）

全回答者のうち、2～3割前後が読書や時事問題、小論文の練習を行っている。比較的対策をとる者が少ないようにも思うが、ここには彼らの情報収集活動が影響していると考えられる。先に記した通り、今回の志願者の多くは、ホームページを用いた情報収集を行っている。情報源の一つであるプログラム在籍学生が受験生の質問に答えるサイト¹³では、入試選抜に対する特別な方策はない、という意味の回答が複数箇所存在する。おそらく、在籍学生によって発信されるこのような情報が、志願者の準備行動に一定の影響を及ぼしていると考えられる。

(5) 第2次選抜に対する準備行動

①準備に費やした勉強時間の割合

第2次選抜は、受験生が自ら決めたテーマに基づく発表と受験生同士での議論（計15分）、面接（約20分）、それまでの内容を最終的にまとめる小論文（3時間30分、但し途中に面接を含む）から構成される。これより、第1次選抜を通過した受験生は、第2次選抜にあたっては発表原稿の作成を行う必要がある。また、場合によっては面接や小論文の練習を行う者もいるだろう。

こうした第2次選抜の準備に、彼らが勉強時間全体のうち、どの位の割合（%）を用いたかについて数値で回答するよう質問したところ、次のような結果が出た。

表7 勉強時間全体のうち第2次選抜の準備に充てた割合

	0～49%	50～59%	60～69%	70～79%	80～89%	90～99%	100%	合計
回答数(名)	4	1	2	11	10	8	11	47
割合(%)	8.5	2.1	4.3	23.4	21.3	17.0	23.4	100.0

まず、全体の平均は79.5%、最頻値は「100%」（全体の23.4%：47名中11名）であった。また、表7にも示される通り、勉強時間の8割以上を第2次試験の準備に費やしている者が全体の半数以上（61.7%：29名）いる。10月上旬に行われる第1次選抜から11月中旬に行われる第2次選抜の間には約1ヶ月半の期間があるが、それだけの長期にわたって受験生が勉強時間の大半を21世紀プログラムの入試準備に割いていることは、受験生を送り出す高校側から問題視されているようである。これについては後に詳しく述べたい。

②第2次選抜の対策方法

次に、第2次選抜に際し、発表原稿を作成する以外の方法による対策を行ったかどうか尋ね、さらに、対策を行ったと回答した者についてはどのような対策方法を用いたか、(1)読書(2)時事問題の学習(3)小論文の練習(4)発表練習(5)面接練習(6)その他の6項目から選んでもらった(複数回答可)。

<第2次選抜の対策方法>(全回答者47名中の割合。括弧内は回答者数を示す)

(1)読書 40.4%(19名) (2)時事問題の学習 10.6%(5名) (3)小論文の練習 10.6%(5名)
(4)発表の練習 63.8%(30名) (5)面接の練習 38.3%(18名) (6)その他 10.6%(5名)

発表原稿の作成以外で何らかの入試対策を行った者は回答者全体の約4分の3(76.6%)にのぼる。具体的な対策方法であるが、やはり中心は発表に関する対策になるようである。まず、最も回答数が多い項目は「発表の練習」を行う者で半数以上(63.8%:47名中30名)、次に多い項目は「読書」で、4割(40.4%:19名)の者が行っている。この読書に関する自由記述の内容をみると、発表内容に関連した書籍が多く、第2次選抜の準備として、自ら設定したテーマに関する様々な文献に取り組んでいる様子が見える。しかし、小論文については、発表と同時に進められる受験生同士の討議を踏まえた形で書くことが求められるためか、対策として「小論文の練習」を行ったものは1割程度にとどまった。

次に、第2次選抜の準備にあたっての協力者の有無について質問したところ、約9割(91.5%:43名)の受験生が「協力者あり」と回答している。この回答群に対し、続いて誰に協力してもらったか(1)学校の先生(2)予備校の先生(3)両親(4)先輩・友人(5)その他から選ぶよう尋ねたところ(複数回答可)、回答数の多い項目から①学校の先生78.7%(37名)②先輩友人48.9%(23名)③両親34.0%(16名)④その他12.8%(6名)⑤予備校の先生8.5%(4名):[欠損値1名を除く全回答者46名中の割合。括弧内は回答者数を示す]となり、受験生の大半は、学校の中から協力者を得ていることがわかる。

しかし、この協力者の有無もしくは協力者の差異は、入試として当然求められる平等性の点からは問題があるように思われる。「誰に協力してもらったか」という質問で「その他」と回答した者の自由記述を見ると、「他大学の先生」「お医者さま」といった知的専門職に協力を求めた者もいる。このような知的専門職に就く者は、大学側から提示される講義の内容と出題の意図とを理解できる可能性が高くなるため、こうした協力者を得ることができたか否かで、第2次選抜の発表の内容には質的な差異が生まれてくることが予想される。もしかすると、知的専門職の者に助言を求めることは、その受験生がもつ行動力を表す指標となるだろうから大いに結構ではないか、という評価視点もあるかもしれない。しかし、それよりもむしろ、受験生が持つ個人的人脈の差異が、発表の内容を形成するうえで大きく作用するのではないかという危惧が浮かび上がってくるのである¹⁴。1次選抜と2次選抜の間に長期間の準備時間があるという現在の入試方法について、今後検討していく必要があるだろう。

(6) 21世紀プログラム受験に対する高校教員の対応

大学毎で独自色の強いAO入試は高校側が対応に苦慮するという話が聞かれる。そこで、21世紀プログラムの受験に際し、学校及び予備校の先生は好意的に対応してくれたか否かについて質問したところ、以下のような結果が出た。

<あなたが21世紀プログラムへの受験を決めるとき、学校・予備校の先生の反応はどのようなものでしたか> (回答者47名中の%, 括弧内は回答者数を示す。)

好意的だった : 51.1% (24名)

あまり好意的ではなかった : 27.7% (13名)

どちらでもなかった : 19.1% (9名)

このように、全体の3割近く(27.7%)が、21世紀プログラムの受験にあたり、教員から非好意的な対応を受けている。この理由について自由記述をしてもらったところ、次のような内容がみられた。

<非好意的な理由> 記述あり13名中(複数の項目にまたがる回答を含む。)

- a) 受験準備に費やす学習時間の負担が大きいから : 5名
- b) 入試対策が困難だから : 3名
- c) AO入試での合格は困難であるから : 2名
- d) 21世紀プログラムが未知数だから : 2名
- e) 他大学を受けて欲しいから : 2名

まず、回答数が最も多いa) 学習時間の負担が大きい、という点であるが、これについては先にも述べた、21世紀プログラムにおけるAO入試が2回に分けて行われることに由来する問題であろう。

図1は、21世紀プログラムの選抜の流れを示したものである。

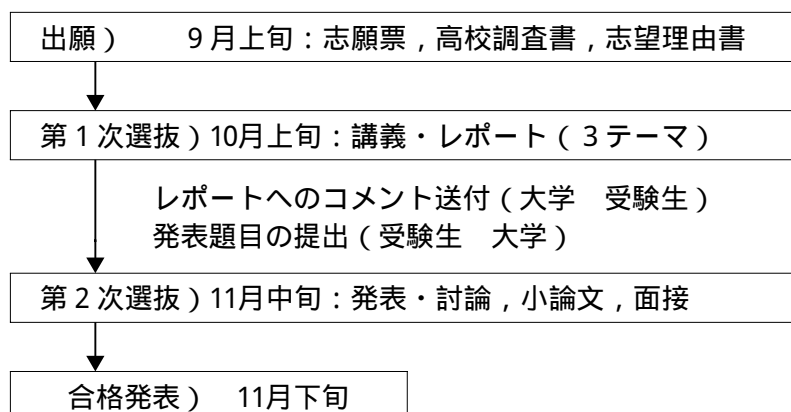


図1 21世紀プログラム入学者選抜の流れ

先に述べたように、21世紀プログラムのAO入試は二回に分けて行われる。第1次選抜では3つの講義に対するレポートを作成するという形式をとるため、特別な入試対策をとらなくても対応できるが、第2次選抜では自分でテーマを設定して行う発表が求められ、準備には相当の時間を割く必要が出てくる。ここで、1次選抜から2次選抜までの準備期間としては受験生に1ヶ月強の時間が与えられることになる。

先に見た通り、受験生の多くが勉強時間のうち8割以上を第2次選抜の準備に充てている。しかし、準備をどれだけ念入りにしたからといって、全ての受験生が合格するわけではない¹⁵。21世紀プログラムの入試は独自性が極めて高く、特に2次選抜のために行う発表のための準備は、他大学の入試対策として直接的には機能しない。そのため、もし不合格になった場合のことを考えると、受験生の合格（すなわち最大利益）を重視する高校教員が、21世紀プログラムの準備に割く時間負担を大きいと見なすのは、ある意味当然のことといえるだろう。

また、b)対策がわからない、c)AO入試では合格が難しい、という回答は、現在の高校教育と21世紀プログラムとの間の知識観の差異を端的に示したものと見える。

わが国における伝統的な入試方式は、特定の問に対する正答（多くの場合、解はたった一つである）を導き出すというもので、これは主に受験生が持つ教科知識の記憶力及び活用能力を測るための入試といえる。こうした入試方式は、教科知識の正確な記憶、すなわち知識の「吸収」を中心に据えたものとみることができる。

一方、21世紀プログラムでは、講義を聴いて提供される知識を吸収するのみならず、むしろそれを土台として個人が「何を考え出すのか」、という知識の「構成・発信」がより強く受験生に求められる。

高校教育は主に、筆記試験による大学入試を目標として、教育活動を展開する。このため、高校教育の中心は入試に対応した教科知識、およびその正確な運用方法の伝達が主眼となる。一方で、21世紀プログラムの入試選抜で求めるのは、自らの関心に従って既存の文献から知識を構成し、他者に向けて発信することである。このような知識の構成と発信については、現在の高校教育ではそれに応じることが出来るだけの十分な経験が培われていないため、対応は困難であろう。こうした知識の「吸収」か「構成・発信」か、という知識に関するスタンス・価値観の差異が、高校側の教員が21世紀プログラムの入試対策を困難と見なす理由になっていると考えられる。

最後に、d)21世紀プログラムが未知数だから、e)他大学を受けて欲しいから、についてであるが、ここには、高校教員がもつ、新しい教育的試みに対するリスク回避の志向性が示されている。国内でも新しい取り組みである21世紀プログラムは、2003年段階で3年目になったばかりであり、社会的評価が定まっていない。受験生にとってより安定度の高い進路こそが利益と考えれば、専門教育のあり方が一般の学部とは大きく異なる21世紀プログラムが社会的に低い評価を受けるかもしれないというリスクを回避しようとするのは、ある意味、教員としての職業的使命感によるものといえよう。

このように、高校教員は、準備時間の負担感、入試対策の困難性、教育に対する評価の不確定性といった理由によって、21世紀プログラムの入試に対する抵抗感を持つ。この中で、後者二点については対応が困難であるが、準備時間の負担感については、入試としての平等性の点からも考慮の

必要があるだろう。今後の検討課題としていきたい。

ここまでは、第1次選抜及び第2次選抜における受験生の準備行動について検討してきた。次に、受験生がどのような意識をもって21世紀プログラムの入試に臨んでいるのかという点について検討してみたい。

5. 調査結果②：受験に対する意識について

(1) 受験生の21世紀プログラム志望理由

21世紀プログラムを受験する生徒は、21世紀プログラムのどのような点に惹かれて入試を決めるのだろうか。受験生に対し、受験先決定に関連する理由15項目について「とても当てはまる」「やや当てはまる」「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の4択で回答してもらった。これを、「とても当てはまる」と回答した者の多い項目順に並べたものが表8である。

表8 受験決定理由
(「とても当てはまる」と回答した者：回答者47名中。 内の数字は順位を表す。)

	回答数(名)	割合(%)
①複数の学部・学科の科目履修ができるから	44	93.6
②幅広い教養が身に付きそうだから	38	80.9
③21世紀プログラムの理念に魅力を感じたから	35	74.5
④英語の能力を伸ばせそうだから	28	59.6
⑤所属学生の話や活動に魅力を感じたから	22	46.8
⑥留学できそうだから	21	44.7
⑦専門的な研究ができそうだから	17	36.2
⑧第一線で活躍する様々な人の話が聞けそうだから	16	34.0
⑧課外活動が盛んにできそうだから	16	34.0
⑩自分の学びたい学部が決められなかったから	12	25.5
⑪九州大学で実施されるプログラムだから	8	17.0
⑫自分にとって無駄なことは学ばなくてすみそうだから	6	12.8
⑬学力試験がない入試形式だから	4	8.5
⑭受験機会が増えるから	2	4.3
⑮高校・予備校の先生に勧められたから	0	0

最も回答数が多かった項目は「複数学部・学科の科目履修」(1位：93.6%)、また、その次にあったのは「幅広い教養」(2位：80.9%)であり、8割以上の受験生が受験決定理由として「とても当てはまる」と回答している。つまり、受験生が受験決定理由として最も重視しているのは、21世紀プログラムの最大の特色である、カバーする知識領域の広さといえる。

また、「専門的な研究ができそうだから」(7位：36.2%)に示されるように、約3分の1の生徒は、研究大学としての九州大学の側面にも強く期待している様子が見受けられる。これに「やや当てはまる」と回答した者(44.7%：8名)を加えるとその割合は約8割(80.7%)にのぼり、受験

生は、どちらかといえば知識の広さをより重視するが、専門的な深さにもまた期待をかけていることがわかる。こうした傾向は、「21世紀プログラムの理念に対する魅力を感じたから」が全体の中で第3位の回答者数（74.5%）を集めていることにも示されている。

それに加え、英語教育に力を入れていることも受験生の評価ポイントとなっている。「英語の能力を伸ばせそうだから」（4位：59.6%）「留学できそうだから」（6位：44.7%）など、半数前後が英語教育に強い関心をもっていることがわかる。

このように、幅広い教養と英語教育の重視という二点に受験生の関心は集まっており、また、専門的な研究を強く重視する学生も少なからずいる。こうした受験生の関心は、21世紀プログラムにおいて重視される教育内容、及び21世紀プログラムが育成を目指す「専門性の高いゼネラリスト」とほぼ合致したものとみることができよう。つまり受験生は、21世紀プログラムがもつ教育上の特色に強い魅力を感じて受験を決めたことが分かる。現段階では、21世紀プログラムが持つ教育上の個性が学生獲得につながっているといえる。

しかし、このように受験生が知識領域の広さを重視することは、一方では学びたい分野の未決定にもつながる。約4分の1の生徒は「自分の学びたい学部が決められなかったから」（10位：25.5%）受験を決めたと答えており、これを彼らの好奇心の広さと見るか、関心の拡散とみるかは人によって評価の分かれるところであろう¹⁶。

また、「学力試験がない入試形式だから」（13位：8.5%）に示されるように、AO入試で危惧されるような、学力試験を回避したいタイプの生徒は1割程度にとどまった。受験層の大半は、学力試験回避といった消極的な理由よりはむしろ、21世紀プログラム独自の特色を重視したうえで受験を決定していることがわかる。

（2）受験大学の選定で重視する点

次に、受験生の受験一般に対する意識をより明確化するために、どのような点を重視して受験大学を選定しているのか、「とても重視する」「やや重視する」「あまり重視しない」「全く重視しない」の4件法で14項目について尋ねてみた。表9は、「とても重視する」と回答した者の多い順に項目を並べたものである。

「複数の学部・学科の科目履修ができること」（1位：68.1%）「科目選択の自由度が高いこと」（5位：55.3%）など、受験大学一般の選定においても半数以上の回答者は、知識領域の広さもしくは科目選択の自由度に重点をおいていることがわかる。また、「提供される教育内容に関心をもてること」（1位：68.1%）、「自分の趣味や楽しみに合っていること」（4位：59.6%）に示されるように、そういった学科目の内容はあくまで彼らの関心を楽しく満たすものであることが重要であるようだ。

また、回答者の半数前後が、英語教育（「英語教育に力を入れていること」7位：40.4%）や、留学ができるか否か（「留学できる機会があること」3位：63.8%）という点を重視して大学選定を行っている。

一方、就職に有利である（14位：6.4%）、または偏差値が高い（14位：6.4%）といった大学がもつ社会的評価の高さについての関心はきわめて低く、資格取得についての関心も薄い（11位：

表9 受験大学の選定で重視する点
(「とても重視する」と回答した者：回答者全47名中。 内の数字は順位を表す。)

	回答数(名)	割合(%)
①提供される教育内容に関心もてること	32	68.1
①複数の学部・学科の科目履修ができること	32	68.1
③留学できる機会があること	30	63.8
④自分の趣味や楽しみに合っていること	28	59.6
⑤科目選択の自由度が高いこと	26	55.3
⑥学問的な専門性が高いこと	22	46.8
⑦将来就きたい仕事に関係していること	19	40.4
⑦英語教育に力を入れていること	19	40.4
⑦教養教育に力を入れていること	19	40.4
⑩得意科目に関係した内容であること	9	19.1
⑪資格(教職, 建築士, 薬剤師など)がとれること	6	12.8
⑫就職に有利な大学・学部であること	3	6.4
⑭キャンパスが都会にあること	1	2.1
⑭偏差値が高いこと	1	2.1

12.8%)

これらに見られるように、21世紀プログラムの受験生は、社会における評価の高さよりもむしろ、自らの知的関心の幅広さを満たしてくれる進学先を選択しようとしていることがわかる。調査結果から表れる彼らの知的関心は、特定分野に限定されないだけでなく、教養性も英語教育もある程度は重視し、なおかつ学問的な専門性も有する(6位:46.8%)、というある意味欲張りな内容を含むものである。いわば、21世紀プログラムの受験生は、社会的な評価の高さにはこだわらないが、知的関心の幅の広さと深さとを満たしたいという好奇心の強い者が多いといえる。

(3) 入試に対するコメント

本調査の最終項目として入試や21世紀プログラムに対するコメントを求めたところ、返ってきた回答は非常に興味深いものであった。

コメントの大半は、本プログラムがとるAO入試に対する肯定的な評価であった。特に多かったのが、21世紀プログラムの入試が「楽しかった」「勉強になった」というコメントである。コメント欄に何らかの記述を行った回答者は25名(全体の53.1%)であったが、そのうち、「入試が楽しかった」という旨の内容を記述した者が11名、また「勉強になった」と言う者が6名、その他入試それ自体について肯定的なコメントを残した者は4名(以上はのべ人数)にのぼった。

以下に、それらの代表的なコメントを示す。

<入試は楽しかった>

- ・非常に楽しく色々と刺激になることも多かった。ディベートの時間をもっと増やして欲しいし、

小論文もあと2, 3枚は欲しかった。受けて良かった。

- ・とても“楽しめた”受験だった。緊張感さえなければ何度でも受けたい。
- ・楽しかったからまた受けたいような、受かっていてほしいからもう受けたくないような・・・
- ・最初はなんだこの入試は！？と思ったし私自身も受験勉強人間だったのでかなりあせりましたが実際にうけてみて一発本番の入試よりも私自身を見てくれる点や、「なんで一次合格したんだろ??」って感じた点など可能性が広がる入試だと感じました。とても楽しかったし、やりがいがありました。
- ・受験はかたくるしいイメージだったけど、とても楽しいです。ぜひ入学したいと思いました。

<勉強になった>

- ・大変だったけれど勉強になりました。結果がどうであれこれからの自分に役立てていきたいです。
- ・いろんな人と話ができてとても勉強になりました。ありがとうございました。とても楽しかったです。
- ・とても為になりました。合否に関係なく受験して本当によかったと感謝しています。ありがとうございました。
- ・楽しかったのと同じくらい大変でした。でもとてもよい勉強になりました。感謝しています。

<その他>

- ・受験ただけでもすでにたくさんの経験をさせていただきました。入学できたならたくさん興味深いことにふれられそうで楽しみです。
- ・21世紀プログラムの入試方法は受験生の人間性や積極性を重視しているので今後どんどん進めていって欲しいです。
- ・1次選抜は素直に講義がおもしろかったです。2次の準備もワクワクしました。
- ・このような人物評価をする大学入試がもっと多くの大学に広まるといいと思います。
- ・緊張はするけど、貴重な経験をさせてもらってうれしい。

こうしたコメントに示されるように、受験生は、準備にかかる時間の負担が大きいかかわらず、21世紀プログラムの入試方法を肯定的に受け止め、受験準備及び入試そのものを自らにとって有意義な経験と見なしていることがわかる。

また、それ以外のコメントとしては、入試に対する意気込みや、プログラムに対する提案がみられた。その中で、受験生がプログラムに対し提案した内容を以下に示す。

<入試や21世紀プログラムに対する提案>

- ・第一次選抜に対するコメントを不合格者にも行った方が良いのではないのでしょうか。
- ・すばらしいプログラムなので年齢の幅をもうすこし広げても良いのではないかと思います。例えば社会人ないしは再受験者を対象になど。
- ・発表時間が10分なのは短いと思います。

・もっと定員をふやして下さい。

6. 考察

ここまで、調査の分析結果について述べてきた。最後に、本調査の成果についてまとめてみたい。本調査の目的は、21世紀プログラム受験生の入試に対する意識及び準備行動の実態について調べることと、その分析を通じ、現行のAO入試についての評価を行うという点にあった。準備行動及び受験生の意識については先に示した通りであるため、ここでは、本調査の分析結果を用いて、現行の入試方法に対する評価を試みる。

まず、21世紀プログラムの入試がもつ長所を述べたい。第一に、現在のAO入試は、プログラムの教育理念に見合った学生を集めることについては成功しているという点があげられる。

調査結果に示される21世紀プログラムの受験生がもつ知的関心は、幅が広いだけでなく学問的な専門性も望むといったもので、これはプログラムが養成を目指す「専門性の高いゼネラリスト」のあり方に近いものとみることができる。

また、本調査によって、受験生自身がホームページやオープンキャンパスなどといった様々な方法によって21世紀プログラムの実際の様子について検討し、そのうえで受験を決定していることが明らかになった。受験生は様々なメディアを活用し、時には入試内容などについて在籍学生にアクセスする様子も見受けられるが、ここには、AO入試がもつ入試基準の曖昧性が影響を及ぼしているといえよう。受験生は、様々なメディアを通じて検討することにより、21世紀プログラムで実際に求められる能力や実際の教育について、そしてまた、自らの関心が21世紀プログラムの教育とマッチングするのかどうかについてある程度予想を立てることができる。こうした受験生の準備行動は、もう一面で、入学後の不適応の回避にも役立っているといえよう。

第二に、入試方法に対する学生の満足度が高いという点も評価すべき点である。入試準備に必要な期間が長くかかり、そこでの準備が他大学の受験に対してはほぼ役立たないにもかかわらず、受験生は現行の入試方式を肯定的に評価している。受験生のコメントの中には、「可能性が広がる入試」「よい勉強になった」「楽しかった」「また受りたい」といった文面が見られた。これより、受験生は少なくとも受験準備において行った学習と、受験それ自体とを有意義に捉え、楽しんでいることがわかる。

受験生のこうした肯定的なコメントは、21世紀プログラムで行われるAO入試が、受験生自身の個性や関心を活かす方式をとることに由来するものであると筆者は考える。

一般的な大学入試では、筆記試験により誰もが同じ正答を導き出すことが求められる。これはいわゆる「正答主義」ともいえるものである。この場合、入試に生徒の個性や感性が活かされる余地はほとんどない。必要なのは正解か不正解かという「正しさ」の追求である。

一方、21世紀プログラムの入試では、受験生自身による発表テーマの設定及び、テーマに沿った文献購読と知識の構成が求められる。この場合、正解という形での「正しさ」は存在しない。テーマ設定とテーマに沿った知識の構成過程の中で、受験生個々人の関心や個性が最大限に活かされることになり、受験生の評価もまた、テーマ設定の妥当性や構成された知識の内容などに関して個別に行われる。入試において個人的な関心や個性が活かされ、評価もまた個別的な観点から行われ

るという個性を重視した入試方式が、AO入試に対する受験生の肯定的なコメントにつながったのではないだろうか。今後、詳細に検討する必要がある。

このように、21世紀プログラムでは、アドミッションポリシーに合致した特性の学生募集と、受験生の満足度の高い入試方式を展開することに成功しているといえる。

しかし、その一方で、現行の入試方式には問題点が少なからず存在する。

現時点で特に問題となるのは、受験準備に要する時間的負担が非常に大きいという点である。先に述べたように、第一次選抜から第二次選抜への準備期間は約1ヶ月半である。その間、受験生が入試準備に用いる時間の割合は勉強時間全体のうち平均8割であり、100%の時間を費やす者も多い。たとえプログラムのAO入試が受験生にとって有意義な体験としてみなされていたとしても、他大学の受験とは選抜方式が全く異なるため、不合格の場合、入試に割いた準備時間は無駄なものになってしまう。これは受験生の利益について考えると、検討すべき重要課題といえよう。

また、受験生の個人的人脈の差異が二次選抜の発表準備に影響する可能性についても注意する必要がある。二次選抜の準備において得られる協力者によっては、発表内容の成果に大きな違いが出てくることが想定される。高校性が持つ個人的人脈は家庭の影響も大きく働くため、場合によっては親の人脈や家庭における文化的環境の差が選抜過程にダイレクトに影響する恐れが出てくる¹⁷。この問題もまた、今後検討していく必要がある。

ここまで示したように、本稿では、受験生に対する調査結果を通じて、21世紀プログラムにおけるAO入試についての評価を試みた。今回の調査は、入試を受ける側である受験生に対してのものであったが、それだけでは入試方式の評価として十分とはいえない。今後、入試方法の評価にあたっては、21世紀プログラムの入試を担当した教員に対する調査など、多面的な視点から検討を重ねる必要がある。これについては今後の課題としていきたい。

注

¹ AO入試とは「学力検査に偏ることなく、詳細な書類審査と時間を掛けた丁寧な面接などを組み合わせることによって、受験生の能力・適正や学習に対する意欲、目的意識などを総合的に判定しようとするきめ細かな選抜方法の一つ」(大学審議会答申「大学入試の改善について」平成12年11月22日)と定義される。わが国では1990年の慶応大学SFCでの実施を皮切りとして様々な大学で実施されるようになった。

² 立花隆氏コメント「変わる大学 九大はいま」、朝日新聞(西日本版)、2004年1月4日。

³ 回答者数の割合。平成16年度入試における実際の1次合格者数は表3の通りである。

⁴ 実質倍率についてはホームページ上には掲載されていない。

⁵ 決定時期が「卒業後」の者については、ここでは遅延群に含めた。

⁶ 自由記述による。

⁷ 自由記述による。

⁸ 大学が提供する情報とは別に、現在、21世紀プログラム在籍学生によってホームページが運営中である(<http://www.rche.kyushu-u.ac.jp/21cp/index.html>)。その中には受験生の質問に対しプログラム学生が回答を行うページ(<http://sekirei.edu.kyushu-u.ac.jp/qqp/>)もあり、そういう意味ではホー

ムページの活用もまた在学生との交流といえる。

⁹ 一方、決定遅延群については、3通り以上の方法を用いた者は29.6%（27人中8人）であった。

¹⁰ <http://www.ac.kyushu-u.ac.jp/21cP/21cP.htm> 九州大学（旧）アドミッションセンター HP より。

¹¹ 21世紀プログラムで実施されるオープンキャンパスは、基本的にプログラムに所属する学生によって運営されており、受験生の相談に応じ、実際の大学生活や入試の実際について様々な情報提供を行っている。

¹² （旧）アドミッションセンターのホームページ（<http://www.ac.kyushu-u.ac.jp/21cP/qa.htm>）による。

また、入試を経験した21世紀プログラム学生の側では、この講義は「文系」「理系」「総合系」という認識がなされているようである。九州大学21世紀プログラム『Orbit』2003年7月、35頁。

¹³ クエスチョン・キャッチャー Pro , <http://sekirei.edu.kyushu-u.ac.jp/qqp/>

¹⁴ 社会学者のブルデューは、大学への進学または大学での学習過程には、学生の出身階層に由来する文化獲得上の不平等が隠されていることを指摘している。中産階級が持つ文化的環境・価値観は、大学で伝達または重視される文化的価値観と親和性が高いためである。受験生が持つ個人的人脈の差異もまた、出身階層に由来する文化的環境の差異としてみることができる。すなわち、21世紀プログラムの入試選抜においては受験生の出身階層や家庭の文化的環境が何らかの影響力をもつ可能性がある。ブルデュー、パスロン著、石井洋二郎監訳『遺産相続者たち』藤原書店、1997年。

¹⁵ 第2次選抜では約半数が不合格となる。

¹⁶ 果たして大学での学問について十分な知識のないまま、進学する学部を決定することが望ましいことといえるのだろうか。21世紀プログラムでは、自ら進学する学部を決定できないという生徒を肯定的に受け止める立場から教育活動を展開している。プログラムに所属する学生は入学後、様々な学問分野に触れる機会をもち、自らの関心の方向性を明確化していく。これを支援するべく、21世紀プログラムでは必修科目として「チュートリアル」を設定しており、学生は担当教官の下、4年間にわたって修学上のアドバイスを受ける。この支援体制の下、学生は試行錯誤しながら科目履修を行い、自らの学習上の関心を方向付けていくことになる。

¹⁷ 注14参照。